

平成26年8月7日(木)

老球の細道45

## コーチへの批判、反発

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

教員時代 PTA の集まりがあると同僚から必ず出る愚痴は「学校に来て話を聞いてもらいたい保護者は来ない。何の問題もない子どもの保護者は来る」と。コーチングスクールも同じである。聞いてもらいたい人は来ない。聞かなくても大丈夫な人達は来る。

8月4日(月)第5回のコーチングスクールが終了した。第1回から比べると参加者は徐々に少なくなってきたが、現在の参加者はほぼ皆勤の指導者達ばかりである。特に会津バスケットボール協会会長の松井先生は皆勤であり、先生の向上心は恐るべし。いつも適確な質問や意見を言うてくださり、この講習会に刺激を与えてくれている。

今回のテーマは「練習の指導について」と「コーチの仁義なき戦い(悩み)」。コーチの練習指導の厳しい現実について私が今まで経験してきたことを話した。これからの若いコーチや今頑張っているコーチ達に少しでもヒントを与えることができれば幸いである。

話したいことがたくさんありすぎて、今回も時間切れで「コーチの仁義なき戦い」の話はできなかった。講習会が終わるとあるコーチから日頃のコーチングの悩みを相談された。内容はこの講習会でも取り上げる予定だった「コーチへの批判、反発」であった。

コーチならば誰もが一度は通らなければならない「通過儀礼」。特にチームが変わった場合にはよくある話である。ひどい時は家族まで巻き込んでしまう。私の鬼嫁は私のコーチ現役時代、大会のゲームを観戦に来ると必ずこの洗礼を受けた。

観客席や高校のギャラリーで漫画「巨人の星」に出てくる「星飛雄馬の姉」のように人知れず見ている、近くで見ている「ギャラリーコーチ」達から私の批判を耳にする。私の鬼嫁とは誰も知らないから色々な批判話が出てくる。残念ながら鬼嫁はそれを楽しんで聞いていたふしがある。コーチとはそんなものである。勝っても、負けても何かを言われる。

ある本に掲載されていた周囲の批判に対する受け取り方についての寓話である。

【あるところに、老人と少年とロバがいました。町に行く時に少年がロバに乗っていると、通りかかった人々が、老人をロバにのせてあげないなんてひどいと言いました。そこで二人はその批判通り、少年が歩き、老人がロバに乗ることにしました。しばらくすると通りかかった人々が、小さな子どもをロバに乗せてあげないなんてひどいと言いました。その批判を聞いて二人は、今度は二人とも歩くことにしました。しばらくするとまた通りかかった人々が、ロバに乗れるのに歩くなってもったいないと言いました。それを聞いて二人は、今度は二人でロバに乗ることにしました。しばらくすると通りかかった人々が、二人でロバに乗るなんて重くてロバがかわいそうと言いました。それを聞いた二人は、今度はロバを運んであげることになりました。そして橋を渡っている時、手が滑ってロバは川に落ちてしまい、溺れてしまいました】

この話の論ずことは、すべての人の言うことを聞いているといいことはないということだ。コーチはどんなときでも批判されるものである。批判されたりすることは、少なくとも興味を持たれているということなので悪いことではないと開き直っている。

きちんと批判を聞きながら自分の考えを伝え、真摯に日々コーチング活動に励むのみ。チームに対して最後に責任をとらなければならないのはコーチ自身であるのだから。